

近江物産

再生技術磨き新境地へ

「モノづくり」の拠点として成長する滋賀県栗東市、草津市。郊外の丘陵には立命館大学や龍谷大学などのキャンパスが広がる学研都市でもある。その栗東市に本社・工場を構えるポリプロピレン（PP）リサイクルの近江物産は、このエリアに集積するモノづくり企業や研究機関などと連携しオープンイノベーションを台言葉に果敢に新事業創出に挑戦する有力企業として海外でも急速に知名度が上がっている。

再生PPは車載分野で市場が拡大している。「車載PPのリサイクルに挑戦。PP再生の品質のさらなるレベルアップを追求する」。芝原茂樹会長のこのような真摯な経営姿勢を自動車や電機業界の顧客は高く評価しており、再生プラスチック



芝原誠二社長

海外への挑戦も視野に

の高品質志向の加速を背景に、「近江ブランド」を冠した上質な製品の受注は右肩上がりが増えていく。「エビテランスに裏打ちされた技術革新に取り組み、海外にも打って出られるような強靱な収益力を備えた企業体の構築を指す」。会長から2015年、経営のバトンを受け取った甥の芝原誠二社長は、敷地面積1万平方メートル、この業界ではトップクラスの分析・評価設備が配置された本社工場を案内しながら、こう力を込め

た。経済産業省から先端事業投資促進事業の認定を受け、約2億円を投じて導入した車載向け高品質PP量産のための専用ラインはフル稼働が続く。中国の廃プラの輸入規制で余剰となった国内の原料をさらに活用し増産を目指す。来期は不純物除去関連の設備投資も計画している（芝原社長）。同社の再生PP生産量は国内シェア1割に相当する年2万ト。この能力を将来、どこまで引き上げるのか。社員のスキルアップのための技術研修も本格化しており、芝原社長は戦略の策定に入っている。